

1960年代後半のジョン・B・キーン作品を読む

兎嶋 一 男

John Brendan Keane (1928-2002) は、ダブリンから260km 西南の町 Listowel (人口約4800人、2016年統計) に生まれ育った。イギリスでの2年間の出稼ぎを終えて1954年に故郷に戻ったキーンは、Mary (1929-2015) との結婚を機に、同町 William Street にパブを購入し、住居にもする。以後、店主の仕事を終えた閉店後から明け方にかけて執筆に勤しんだという。¹

本稿は1960年代後半に上演されたキーンの戯曲三作を読むものである。

*

The Field

アイルランド南西部 Carraighthomond 村にある Mick Flanagan のパブは公的に認められた競売場でもある。1965年4月、店主ミックと妻 Maimie は、寡婦 Maggie Butler から依頼された農地売却の競売を公示する。当該の農地は Thady (通称 Bull) McCabe と息子 Tadhg がマギーから借りている土地にかかり、父子の飼う羊の牧草地になっている。ブルはミックとバーの常連 The Bird (通称) を抱き込み、マギーの求める最低売却価格の4分の1で自分が落札するように仕組む。そこにイギリスから William Dee が、建築用ブロックを造る工場用地として同地を買おうと現れる。村人に威勢を(ひどく暴力的にも)ふるうブルは、自分の牧草地に侵入したロバは撲殺されたなど

1 伝記的事項は主として1964年までのキーン自身の自叙伝である Keane, John Brendan. *Self-portrait*. Cork: The Mercier Press, 1964. と、Smith, Gus. *John B. the Real Keane: A Biography*. Irish Amer Book, 1998. を参照した。

と話して、ウイリアムを脅す。しかし、ウイリアムは入札を思いとどまろうとしない。ブル父子は夜半にウイリアムを待ち伏せして再度脅迫する。そして、言い争いの末に、ウイリアムを殴り殺してしまう。

競売は何事もなかったように、ブルが落札して終わる。

事件を捜査する Leahy 巡査部長と村の司祭 Murphy は、ブル父子の犯行である証言を村人に求める。しかし、ブルを恐れて誰も何も言わない。

1958年11月15日、キーンに住むリストウェルから約24km南の小村 Reamore で、10日間行方不明だった農夫 Maurice Moore の遺体（後に絞殺と判明）が、自宅近くの溝で発見される。犯人は、被害者と土地の境界線で争っていた隣人 Dan Foley という噂が流布する。

1959年 Kerry 郡の Moynihan 司教が、メディアを通じて情報提供を村の人びとに求める。しかし提供者は現れず、ムーアは無実を訴え続けたまま、1960年代初頭に死亡する。²

キーンはこの事件に強い関心を覚え、現場を訪れるなどして、*The Field by the River* という戯曲を構想する。それは1962年に完成するが、事件の記憶が人びとに生なましく残っていることなどを理由に、妻マリーなどから冷却期間を置くように勧められる (*A Biography*, pp.134-35)。

1965年11月1日、題名が *The Field* と変わり、ダブリンの The Olympia Theatre で上演される。³

マギーが亡夫の遺産である農地を売るのは、老い先を生き延びて行くためである。よって競売は彼女の生命に関わるものと言える。しかし、マギーのこの事情は、ブルの所有欲に凌駕される。

Bull: I watched this field for forty years and my father before me watched it for forty more. I know every rib of grass and every thistle and every whitethorn bush that bounds it. (p.26)

2 電子版 *The Kerryman* 紙 (2008年9月2日付) 参照。 <https://www.independent.ie/regionals/kerryman/news/the-unsolved-murder-that-shook-the-county-27378365.html> (2018年9月1日)

3 テキストは Keane, John Brendan. *The Field*. Cork: The Mercier Press, 1991. を使用。

Bull: What about the grass? What about my lovely heifers?

Tadhg: No more meadows nor hay?

Bull: No foreign cock with hair-pin and tie-pin is goin' to do me out of my rights. I've had the field for five years. It's my only passage of water. You're tackling a crowd now that could do for you, man. Watch out for yourself. (p.39)

問題の土地（4エーカー、約130m四方相当）は、ブルがマギーから借りて肥沃な牧草地に育ててきた土地である。また自分の飼育する家畜が、水場の川に行く通り道にもなっている。さらに80年以上の積年の思い入れが続いてきた土地であり、いずれは息子タイグに受け継がせようとするものである。すなわちマッケイブ一族にとっては、この土地は過去から未来に続く生命線である。自分らこそ正当な土地の所有者という、ブルの意識はきわめて強い。

ブルはミックを脅して裏取引を持ちかけ、競売の手数料を上乗せすることで同意を得る。居合わせたバードにもこの謀に加わらせ、自分が廉価で落札するように仕組む。何としてでもこの借地を買い上げて自分のものにする、ブルはこの好機を逃すわけにはいかない。件の土地は生き抜いていくためには不可欠のものであり、長期間育ててきた愛着の強いものである。これを侵すものを、ブルは許さない。

ブルという通称は、雄牛の如き強さを表しているが、ブルが暴力的で危険であることは、村の誰もが認めている。1幕は、ブルの土地への執着と、彼が凶暴で村中を威圧する力を持っているということを強く印象づける。

この暴力が支配するような舞台の空気を少し和らげる滑稽な場面がいくつかある。

1幕1場、メイミーは9人の子の母で、10人目を妊娠中であるが、バードは彼女の容色が衰えぬとおだてて、飲み代を払わずに済ませようとする。

1幕3場、ブルのいとこ Dandy McCabe が、最愛の妻を競売にかけたならば、理想的な妻・主婦であるがゆえにかなりの高値がつくと自慢する。

2幕1場、ウイリアムを待ち伏せする間に、タイグが結婚相手にと考えている村の娘についてブルに話す。ブルは、最適の嫁と言えるのは、乳搾りが上手く、家畜の世話ができて、男並みの力持ちであって、持参金（もしくはその代わりの土地）があること、と至極真面目に説く。

ブルは18年間妻と口をきいておらず、寝室は別になっている。妻の機嫌を

取るためにテレビを買い、新しい浴室を設けたものの、妻との不仲は解消されないままである。ブルの強圧は妻には効かず、家庭でのブルの弱さは、笑いを誘う。

しかし、妻との不和の原因は、牧草地に侵入した tinker の仔馬をブルが殺したことにある。先のロバ殺しに続いて、ブルにとっては自分の牧草地を守った正当な行為である。牧草地を守るためには「殺し」をも厭わない、そういうブルの気質がここで示される。「殺し」は人間にも適用されるのか。その緊張感は一幕から舞台の底に流れていて、やがてウイリアムが殺されるという劇的な場面へと向かっていく。

レイヒー巡査部長がブルを犯人と疑うロバ殺しの逸話は、ブルの土地への激烈な所有欲を示している。

Bull: Why couldn't you stay away, you foolish boy? Why couldn't you stay away, you foolish boy? Look at the trouble you drew on yourself, you headstrong foolish boy, with your wife and family depending on you ... Jesus Christ—

[He kneels and examines WILLIAM. He is suddenly aware that WILLIAM is dead. He looks desperately around, then rises and remains looking down at WILLIAM. He then suddenly kneels and takes WILLIAM's head in his lap and whispers an act of contrition. Looks around him and disappears into the night.] (p.60)

ウイリアムがタイグに殴り倒された後の場面（2幕1場）である。ブルは倒れているウイリアムに、「悔恨の祈り」を囁く。しかし、それは自分と息子の乱暴な行為（殺人）を悔いるものではない。ウイリアムが死んだのは彼自身の誤った判断が招いた結果であり、いわば自業自得の愚かさによるものだ、とブルは思っている。

牧草地と家畜はブルには命そのものである。大切に育ててきた牧草地がコンクリートで覆われることは、ブルにとって自身の尊厳と生命を奪われることに等しい。農地を失うことは、ブルの父から子孫まで幾世代にも渡る一族の死滅につながる、その怖れはもはや強迫観念に等しい。ブルの防衛本能は殺人を犯すことへの躊躇いを生まない。

こうした土着のアイルランド人の土地への執着を阻むウイリアムは、反アイ

ルランド的人物とされている。ウイリアムは産後の肥立ちが悪い妻の静養地を兼ねて、工場用地を妻の出身地近くに求めた、と言う。彼はゴールウェイ出身であるが、20年前に一家でアイルランドを捨ててロンドンに移住しており、歴史上多くのアイルランド人が感じてきたとされるイギリスに対する嫌悪感が希薄になっている人物である。ブルがどれだけ本能的とも言える土地への執着心を有しているのか、その深い思い込みを、歴史的経緯を踏まえて理解するだけの想像力が、ウイリアムには欠けている。ブルらアイルランド農民の土地への拘りに思いの寄らない彼は、イギリスから来た“a total stranger” (p.50) なのである。農地をコンクリートで固める行為は、ブルに代表されるアイルランド農民の土地への愛着を踏みにじる。ウイリアムは“an imported land grabber” (p.49) なのである。

この思いは村人に共通している。ウイリアムは弁護士 Nesbitt の口利きであることを盾に、競売への参加をあくまでも法的に正当な権利と主張するが、到底村で受け入れられるものではない。

こうした偏狭な村社会に生きる者の意識が、この舞台の背景には潜んでいる。

ミックとバードはともにブルの悪巧みに加担した。その後ろめたさと傍若無人なブルへの恐れから、彼らはブルの悪行を見てみぬふりをする。ブルはその強圧ぶりを象徴するように、固いトネリコの木でできた杖を振り回すのだが、彼に異を唱える村人は、ミックやバードらと同様に、誰もいない。

こうした村の人びとの姿勢を疑問視するのが、リーミー少年である。両親の営むパブで、Boderick 氏が Blezop 兄弟に殴られるという事件があった。その際に父親ミックが黙っていたことを、リーミーは恥ずかしく思っていた。この時の感情を思い起こして、リーミーはブルのこと（ウイリアム殺害の一件）を警察に告げようとする。しかし、リーミーの母メイミーは夫ミックの立場（不正競売の共犯者であること、ブルの命令下、村人はパブへ出入りしなくなることを）を説き聞かせ、一家が村八分にされて、店が閉鎖の憂き目に遭わないようにと、リーミーを思いとどまらせる。

道徳心や正義感を圧殺する強い村の力には、司教の説教も効かない。司教は、5週間前のウイリアムの件は殺人であり、証言を拒否することは共犯行為に等しいと説くが、村の皆は沈黙を保ったままである。信仰の導きは、村の中でおとなしく生きていこうという人びとには、実に無力である。

5日後、ブルは設定された最低売却価格の半値以下をマギーに払って土地を

手に入れ、上機嫌でいる。レイヒー巡査部長とカリクコーモン村の教区司祭マーフィが、村の人間一人ずつに尋問を始めるが、人びとはブルのアリバイを証言するだけである。土地を安値で奪われたマギーですら、ブルを恐れて黙ったままだ。ミックとメイミーも、ブルのアリバイを証言する。バードも警察の高額な情報提供料に惑わされることはない。それどころか、ブルに殺されたくないために証言を捏造し、それに加えて、犯人は tinker か teddy boys か村人の知らない誰か余所者ではないか、とまで言い出す。リーミーは、ボデリック暴行の件でブレズップ兄弟を裁こうとしない村の大人たちの不正に心を痛め、両親の不甲斐なさに失望もした末に、ブル父子のウイリアム殺しの証言をするべきか否かのジレンマに陥り、神経的にまいってしまう。リーミーの素朴な正義感・倫理観は、こうしてブルの脅威と村の論理に蹂躪されてしまう。

ブルは、ウイリアムが人妻と不倫の関係となり、その夫に殺されたのかも知れない、とまで言う。司祭に神の審判を問いかけられても、ブルは動じない。亡くなったウイリアムの妻の不憫を訴えられても、ブルは何ら憐憫の情を示さない。死んだ者はいずれ忘れ去られるもの、と言い放つだけである。

レイヒー巡査部長はロバ殺しの件では、ブルを出廷させただけで済ませ、ブレズップ兄弟の傷害事件では、ミックとともに黙認する。暴力に関してその都度態度が異なるのは、正義感や職務上の義務感が希薄なせいである。彼の言動は、警察官という立場を踏まえた上での偽善的なものにすぎない。ウイリアムの件でも捜査は試みたが、外からの圧力ゆえに正義を求める姿勢をとっただけで終わる。

郡の司教よりは村の人びとと親密な関係にあると思われる村の教区司祭マーフィは、証言が得られない場合、冠婚葬祭など一切の教会の聖務を執り行わない旨を示唆する。キリストから見捨てられないようにと訴え、村人に事件の証言を強く要求したのである。しかし、村人は沈黙を保つ。教会の影響力も信仰の救済も、村ではブルの脅威を超えることはない。密告者になることの方が、何よりも善くないことなのである。自身の立場を村という共同体内で守ることこそ、村では生きて行くうえで最優先される。

村の人びとにとって、土地は生命そのものであり、土地に根ざすものはすべてに勝る。土地は侵されべからざる聖地であり、ブルは聖地侵犯者に対する完全勝利者となって、幕が降りる。

アイルランド島の民族的ルーツは、先住民に渡来したケルト人が同化した

ゲーリック・アイリッシュとされる。12世紀、イングランドを征服したノルマン人は、アイルランドにも入植し、先のゲーリック・アイリッシュと同化して、アングロ・アイリッシュの祖となる。1541年、イングランド王ヘンリー8世（1491-1547、在位1509-47）がアイルランド王ともなり、イングランドからの入植者はさらに増えていく。こうして、前代のアングロ・アイリッシュは旧イングランド人（Old English）、後代のアングロ・アイリッシュは新イングランド人（New English）と呼ばれるようになる。

以後、アイルランド島の土地の所有を巡る対立関係は、住民の大半を占めるゲーリック・アイリッシュおよびその族長たち（chieftains）、イングランドから入植して定住者となった（旧および新の）アングロ・アイリッシュ、イングランドにいる植民地統治者、という三つ巴の様相を呈していく。それはやがて、1870年制定の（その後何度かの改正を重ねる）The Land Act以降一層過激になっていき、ゲーリック・アイリッシュ小作農を解放する運動へと発展し、民族・宗教上の抗争という性質を帯びながら、イギリスからの独立運動へと続いていく。

このように、アイルランド島の住民の土地への執着は、アイルランド島の土地を巡る争いとイギリスからの独立紛争に重ね合わされる問題である。

しかし *The Field* の本質は、ブルの土地獲得への執着とアイルランド人に長年受け継がれてきた上記のような土地への欲求にはない。

村の閉鎖された社会では、レイヒー巡査部長に表徴される司法の力と遵法精神も、マーフィ司祭とその上級位階の司教に表徴される宗教（信仰）上の道徳観・倫理観も、すべて二の次となる。村という社会では、教会・信仰も国家・司法も無力となり、家族もしくは共同体内の強力な絆・忠誠心が優先される。個人の倫理観・道徳観は、村での静穏な生活を維持する意識に屈服させられてしまう。

The Field は、ブルを軸に村人の偏狭な意識と徹底した利己主義を写実して、法律や世間の常識や倫理観を通用させない村社会の有様を示した戯曲なのである。

こうした負の気質が自己に潜むことを暴かれたと気づいて（あるいは無意識に感じて）不快感を覚えた観客は少なくなかったであろう。1965年11月上演の際には、劇場爆破や作者キーンや彼の家族の安全を脅かすなどして、公演中止を強いる脅迫があったという（*A Biography*, pp.136-41）。

*

The Field の上演後にキーンは、ミュージカル *The Rose of Tralee* (Cork 市の The Opera House で 1966 年 4 月初演) の構想を開始し、自営のパブの店主の傍ら、Sean O'Casey (1880-1964) の *The Plough and the Stars* (1926 年初演) の舞台に俳優として出演している (*A Biography*, p.146)。

この時期、キーン (38 歳) は Language Freedom Movement (ゲール語を公立学校の必修科目から外す運動) に関わっている。1966 年 9 月 21 日ダブリンの The Mansion House で行われた集会に出席したキーンは、運動に反対する過激な国粋主義者らの暴力的な脅しに身の危険を覚えたという (*A Biography*, p.156)。

キーンはゲール語を大切にしていると知られていたので、ゲール語を強制するという事に反対したのであろう。すべての事柄において、個人の自由が抑圧されるべきではないというキーンは、旧弊な因習や野卑な既成概念による規制・強制・束縛を嫌ったのである。

*

The Rain at the End of the Summer

熱い夏の土曜日。Joss O'Brien (62 歳) の一家が裏庭で昼食を摂っている。当主のジョスは “Five drowning fatalities in a week!” (p.1) という見出しの新聞記事を読んでいる。修道女になることを希望している末娘の Ellie (19 歳) は、9 年前に妻を亡くした父ジョスに、家政婦 Kate Mulcahy との再婚を勧める。

夜、ジョスの興した会社の経営者となっている二男 Jamesy が、村の娘 Monahan (19 歳) を妊娠させた、とジョスに告げる。モナハンと結婚するようにジョスは言うが、ジェイムズイは兄 Toddy が弁護士として娘の家に示談の交渉に赴き、自分は広告会社の社長令嬢 Marcella と結婚する、と主張する。

翌日。トデイの婚約者 Penny Cassidy (旧家の娘) が訪ねて来ている。ジョスは彼女に、ケイトを “our housekeeper” (p.31) と紹介する。

エリーにせつつかれたジョスは、ケイトが結婚に応諾していないにもかかわらず

わらず、息子たちと一緒に3組合同での挙式を望む。兄弟は同意しない。

夜。ジョスは9年前のアルコール依存症が再発したかのように、ウイスキーを飲んでいる。モナハンと結婚することこそジェームズズィがなすべき償い、とジョスは依然として言っているが、聞き入れられない。ケイトが家を去ることになり、ジョスは息子たちを家から追放して、オブライエン家の当主の実権を取り戻す、と宣言する。

The Rain at the End of the Summer は、1967年6月19日ダブリンの The Gaiety 劇場で初めて上演された。⁴ 演じたのはキーンの処女戯曲 *Sive* を1985年6月13日にコークで再演した劇団 The Southern Theatre Group であった。

開幕当初に庭の植え込みにエリーが鳥の巣を見つける。オブライエン家の崩壊が予言される場面（1幕1場）である。

TODDY: Don't touch it and don't breathe into it.

ELLIE: Why not?

TODDY: You'll evict the tenant. If you breathe into a bird's nest, the birds leave it.

ELLIE: Really? I didn't know!

JOSS: Has it got any eggs in it?

ELLIE: No! It's empty.

TODDY: Probably hatched and fledged under our noses. Imagine that! A whole family broken up in a single season. (pp.1-2)

暗示される「一家の瓦解」は、新旧の世代の考え方の相違として展開されていく。

それは庭でジョスが読んだ新聞記事の水難事故への反応から示される。エリーは犠牲者をただ悼み同情の意を表すが、トデイとジェームズズィは霧深い天候を考慮しなかったゆえの自己責任と非難する。ジョスは家族を失うことに

4 テキストは Keane, John Brendan. *The Rain at the End of the Summer*. Dublin: Progress House, 1968. を使用。

これより先に1968年11月29日 *The Roses of Tralee* がコーク市の〈オペラ・ハウス〉で上演されているが、テキストが入手できなかったので、その内容は不明である。

わずかに思いを馳せるのみで、他人の死に関心を寄せることは無い。

ジョスは3人の子供たちがそれぞれ大人になったことを思い、妻の死を機にアルコール依存症となった自分が、それを乗り越え、一代で財を成して町の上流に仲間入りしたと述懐する。

しかし、ジョスの心の平穏は、ジェームズから最近眠れないでいると相談されたことから乱れて行く。

JOSS: But no matter how steady things may seem, you must always make allowance for the local storm. (p.7)

舞台の行く末をまたしても予言するかのような暗示的なつぶやき通り、ジェームズの告白はジョスにとって深刻なものとなる。

ジョスはジェームズに、妊娠させた村の娘と結婚するように命じる。しかし、ジェームズは拒否する——娘とその両親に慰謝料を払い、(中絶は違法なので) イギリスで出産させて、その後に赤ん坊を施設に預けて里子に出す。示談には兄の弁護士トデイが当たる。ジェームズの結婚相手であるマーセラも彼の些細な“one foolish mistake” (p.33) と承知している。ジョスの考えは時代遅れである——と。

ジョスはジェームズに、生涯罪悪感を抱くことにならないようにと助言する。しかしジェームズは、“a stupid vulgar whim” (p.34) で将来を不意にする気はない、と耳を傾けない。トデイは自身の性格を“a moral coward” (p.40) と自覚していて、“A funny thing ... many people despise and ridicule a man of virtue. It’s because they cannot be like him. ... If a man doesn’t measure up, his best reserve is ridicule.” (p.41) と、ジョスの倫理観を認めながらも、世間の嘲笑的的となると指摘する。そして、ジェームズの過ちの後始末をする。

このように舞台では、富裕層(新興のジョスの息子たちはすでに富裕層に入る二世)の身勝手な理屈と、ジョスの信仰に基づく旧来の倫理観の対立が続いていくように見える。しかし、(再びアルコール依存症になったと思われるほどに酔った)ジョスが最後に自分が結婚すると言い放った瞬間、ジョスの「篤実な人物」という虚像が崩れ去る。

JOSS: ... he (Alexander) raped a kitchen slut in a moment of passion. Of course, in those days such behavior was expected of Kings. The girls felt privileged for the rest of her life and I'm certain she boasted of it to her grandchildren. (p.66)

新世代の富裕層の息子たちが、感情を考慮せずに合理的に人間の営みを処理するごとく、ジョスの信仰心に根付いた倫理観と思われていたものが、実は偽善的であったことが露頭する。ジョスは古くからの慣習に倣って、息子ひいては一家の不始末を独善的に処理したかっただけである。人道的にみえていたジョスは、単に旧弊な意識に凝り固まった人間でしかなかったことがわかる。

ジョスとケイトの結婚に、トデイが難色を示す場面（2幕2場）がある。トデイはきわめて合理的に物事を処理したい人間で、式場の用意など物理的側面から父親との同時結婚は不可能である、と言う。また、父親ジョスが再婚すること自体は譲歩できるが、その必要性については“preposterous”（p.48）と疑問視する。

ジョスはそれに対して“a crying, fearful need for companionship”（p.49）と言い、“Kate is my insurance against loneliness.”（p.50）と抗弁する。

ジョスにとってケイトは、トデイの婚約者に紹介した（2幕1場）ように、「家政婦」であり「保険」でしかない。すなわち、王族が特権を与えればお手付きを喜ぶ類の女でしかないのである。ケイトがジョスの求婚を拒絶して一家を出る決心をしたのは、一家に献身的に尽くしてきたにもかかわらず、彼女に対する愛情がオブライエン父子にはないことをみてとったからである。

エリーが修道女になりたいと言った際にも、ジョスの女性観は垣間見られた。ジョスがエリーに“the function of a woman to have babies”（p.14）と言って結婚を勧めた場面（1幕2場）である。孫が欲しいというジョスの気持ちの底には、子を持つことこそ“natural motherhood”（p.14）であり、女性が果たすべき役割という固定観念が潜んでいる。さらにジョスはエリーに“it's a pity you don't know more boys.”（p.15）と言って、女性は男性とつがいにならなければ哀れという考えを示してもいる。

ケイトがジョスに“You're no different from any other old man who wants a woman”（p.14）と言う時、ジョスの女性観は、（上演当時のアイルランドの）年長の男性一般に共通していることが示唆される。

このようにジョスの本質を看破したケイトであるが、彼女もまた旧態然とし

た階級意識から逃れられない。ケイトがジョスの求婚に躊躇する理由は、雇い主が使用人の家政婦と結婚するとなれば、世間は口さがない、という懸念であった。

この意味では、ジェームズの子を身ごもったモナハンの父母と兄も同列に並ぶ。トデイが言うには——小切手を渡されたモナハンの父親は黙ってそれを受け取った。モナハンの兄は襲い掛かってくる気配だったが、両親に抑えられ、父親から小切手をひったくって出て行った——のである。

上流の慰み者となった下層の者は、昔からのやり方で世間の非難がましい目から逃れ、同時に慣習に則って現実的な処置を甘んじて受ける。村の娘の一家もまた旧態然とした意識にとらわれたままである。

旧世代から続いている固定観念は、ジョスが息子たちを“ungrateful hypocrites” (p.54) と断じ、“My authority is being flouted in my own house.” (p.54) と嘆く様子にも表される。酔漢の戯言にも聞こえる最後のジョスの宣言は、傲慢そのものである。

JOSS: (Looks forward) I'll rule with an iron hand from this night forward. (Looks about him as if he expected a reply) ... Maybe I'll marry again. ... A young woman who'll give me children and this time ... by God, this time, I'll make no mistake. ... (Louder, with more emphasis. He lifts a clenched fist) This time I'll rule with a mailed fist and I'll raise a God-fearing brood of catholic Irishmen. (p.72)

一代で財を成して上流に仲間入りしたジョスは、成長した子供たちに父親の情愛を注ぎ、やがてはその子供らに孫を望み、自身は再婚して平穏な老後の生活を送るはずであった。こうした考え方は60年代の（アイルランドの）地方では、まだ極めて一般的な考え方であったと思われる。

しかし、新しい世代の合理的な考えについて行けないジョスを、キーンは最後は狂気に陥らせる。新旧の道徳観の対立の結果、旧世代のジョスは敗北したように見える。しかし、敗北はジョスだけでのものではない。旧弊な考えに縛られた息子たちもエリーもケイトも村の娘の一家も、キーンは否定する。信仰に基づく慈愛も、旧弊な意識から抜け出せないままであれば、それは救いどころか旧弊な固定観念という束縛でしかない。ジョスへの同情を否定できない観

客もまた同様である。独善的で旧態然とした人びとは、ジョスの狂気に重ねられる。

このような辛辣な人間観は、次の *Big Maggie* に引き継がれる。マギーのような女性を俗悪と見る目の奥には、ブルの支配する *The Field* の村人やジョスの家の人びとのような旧悪・旧弊という意識が潜んでいる。

*

Big Maggie

墓地で Maggie Poplin が煙草を吸っている。奥で棺に土を掛けて、マギーの夫 Walter (60歳) を埋葬する音が聞こえる。マギーは二女 Gert に亡夫ウォルターの墓石に献花するように言われるが、空涙を流す偽善的な甲意には耐えられない、と断る。マギーは葬儀屋 Byrne に棺代を値切り、無味乾燥な墓碑銘を注文して、埋葬を事務的に済ませるように強く求める。

マギーは長男 Mick と二男 Maurice に恨み言を述べる——夫ウォルターの虐待を受けていた時に、彼の暴力を恐れて自分を救ってくれなかった、と。

ウォルターの一番のお気に入りであった長女 Katie だけが、“The King is dead!” (p.178) と亡父を称える。

ポプリン一家が経営する雑貨店に出入りする業者 Teddy Heelin が悔やみの挨拶に来る。葬儀当日でも店は開くと言うマギーは、ガートを連れてテディの車で町に出る。

マギーは店に戻り、土地・家・店など一切を、亡夫から生前相続していたことを明らかにする。ミックは農場を折半することをマギーに求めるが、断られて家を出ることに決める。出がけに店の金を奪い取るミックに、マギーは勘当を言い渡す。

モーリスが Mary Madden と結婚したい、とマギーに言う。マギーはマドン家の財産（主として所有する牛の頭数）とマリーの持参金を訊いて、結婚に反対する。

マギーがケイティの不行跡を追求する。ケイティが既婚者 Toss Melch との情事を認めると、マギーは以前にケイティに言い寄っていた Johnny Conlon に即刻嫁ぐように、ただし持って行く持参金はなしでと、命じる。

3か月後。マギーとガートが店をやり、ケイティが奥で家事を受け持って

いる。セールスマンのテディは店に来ていた葬儀屋バーンから、ケイティが結婚したことを伝えられる。テディを心憎からず思っていたガートは、彼と夜に会う約束をする。

マギーはじゃれあう二人を見て、ガートに近寄らないようにテディに命じ、さらに自分と密会するように段取りをつける。

夜。マギーはテディが自分といちゃつく姿を、ガートに見せつける。

1年後。ケイティが赤ん坊を連れて、店に来ている。ガートはイギリスのミックの所において、看護師になっている。マギーは、モーリスと持参金の無いマリーとの結婚を依然として認めない。

マギーが掛取りの電話を終えたところに、マリーと母親 Hanna が現れ、モーリスと結婚する許可を求める。マギーは二人を銃で脅し、頑として譲らない。遂にモーリスは “We’ll be in England in a week and we’ll be married and I’ll never be back here again” (p.232) と言い、一同は去って行く。マギーが一人残って、幕となる。⁵

マギーは無慈悲で我欲の強い人物に見える。暴力をふるう浮気性の夫には、愛想を尽かしていたので、夫が亡くなったところで何ら感傷を示すことはない。

墓地に居合わせた老夫婦はそれを知らずに、マギーを慰めようとする——亡くなったウオルターは酒癖も女癖も褒められたものではなかったが、働き者であり、長患いせずに財を残したい人だった、と。マギーが同調しないであると、二人は “Big Maggie Poplin is a dab hand at breaking spirits.” (p.180) と批判する。さらに、マギーがウオルターと結婚した目的は “for the security” (p.180) だと非難する。しかし、マギーはまったく動じない。亡夫には憎しみしかないのである。

マギーは、匿名の手紙によってケイティが既婚者トスの浮気相手になっていると知り、ケイティが妊娠している可能性を想い、即座に他の男ジョニーと結婚させる。マギーはしたたかに持参金を受け取ることも忘れない。大多数の村の人びとの想像通り、ケイティは情事の相手の子供を夫の子供と偽り通すのだが、マギーが “the worst thing about telling lies isn’t that it’s a sin but it’s such a

5 テキストは Keane, John Brendan. *Big Maggie*. The Mercier Press, 1969. を使用。

waste of time trying to wriggle out of it when you're found out.” (p.189) と言うように、ケイティは「保障」を確保して生き抜いていく。

マギーはガートがテディに魅かれていると知って、自身と彼との痴態をガートに見せて、二人の仲を引き裂こうとする。そして “Any girl with an ounce of sense would thank me. If you had your own way you'd make a complete wreck of your life.” (p.218) と言い放つ。

家長となったマギーは子供らに隷従の立場を強いる。そう考えてしまうと、マギーは子供らを犠牲にする暴君としか見えなくなってしまう。

しかしマギーは、女性は愛情だけでは生きていけない、社会的・経済的な基盤が無くてはならない、将来の「保障」のない男に身を任せることは愚かである、ということ身を以て知る女性である。マギーの母親としての役目はここにある。長女ケイティに安定した家庭を与え、二女ガートが女たらしにひっかかるのを防いだのである。マギーの辛辣な言動は、子供らを思うマギーらしい愛情ゆえのものである。

マギーは夫の死を契機に、夫に従属する妻という束縛から自らを解放した。夫が浮気しても、息子らがわがままを言っても、妻・母はすべて耐えるもの、そういう考えにマギーは抵抗する。因習的に女性に求められてきた生き方——家を守り、母親として子を育てる——そういう女性の在り方をマギーは拒絶する。

マギーは、性の相手とされる女性の立場にも容赦ない。

マギーが夫の浮気相手である人妻 Moll Sonders を裸のまま追い払ったことを、ケイティが思い出して酒場に来る男たちに語る場面（1幕2場）がある。

KATIE: ... all those men in the bar that night had the same story. ... The wives were too damn good. Damn them, they thought it was a sacrilege to fornicate with their own husbands. (p.191)

男たちの嘆きは、夫以外ならば性交を厭わぬと言う冗談にも聞こえるが、これは性交は「すこぶる良き」妻たちの当然の義務と言う観念の裏返しにすぎない。バーンに求婚されたマギーが、“I would sooner be buckled to a baboon than be buckled to you.” (p.217) と悪態を吐いて断る言葉にも、それは明らかである。

Big Maggie の原稿は最初にアベィ劇場に送られたのだが、劇場主幹 Earnest Blythe (1889-1975) によって不採用となる。しかし The Listowel Drama Group (1943年旗挙げのアマチュア劇団、キーンの舞台劇の処女作 *Sive* を1959年に初演) による改編の求めに応じた末に、1969年1月20日コーク市の〈オペラ・ハウス〉で初演される。

その後1988年11月にアベィ劇場で上演された際、最後の場面に、マギーの独白が加えられる。⁶

MAGGIE: From now on I'll confess my fantasies to a lusty, lanky man with muscle, a man brimming with sap and tasty, a man who'll be a real match for Big Maggie Poplin. The weal of the chastity cord is still around my belly and the incense is in my nostrils. I'm too long a prisoner but I'll savour what I can, while I can and let the last hour be the sorest. [*The End*] (p.235)

マギーの性についての意識が明瞭になり、純潔を重んじ、女性の禁欲は美德という当時の考え方への反発が強調されている。

テディを誘惑しようという魂胆でマギーが、夫との不和の原因を語る場面(1幕3場)があった。女性の性欲という点について、性行為の相手と言う観点に加えて、ここでマギーは女性の意識について述べている。

MAGGIE: For ten years he (Walter) didn't sleep with me. In the end I didn't want him, but it was a strange and terrible way for a healthy woman to live. (p.211)

女性が性の満足を望むことは「健康」的なことと、マギーは言う。抑圧の力となっているのは“the chastity cord” (p.235) すなわち、狭義では教会の強い戒めであり、広義では社会に根付いている慣習、世間で既定される常識と言う the social code である。

6 マギー役はキーンの戯曲 *The Year of the Hiker* (1963年初演) で Freda 役を演じた Anna Maria Manahan (1924-2009) であった。マナハン は1998年に、Martin McDonagh (1970-) の *The Beauty Queen of Leenan* (1996年初演) で、トニー賞助演女優賞を受賞する。

電子版 *The Guardian* 紙 (2009年3月27日付)。https://www.theguardian.com/stage/2009/mar/27/obituary-anna-manahan (2018年9月1日)

司祭たちが上演中に顔をしかめて劇場から出て行ったのは、先に述べたマギーの「不徳の際み」と不信心が、実は教会や信者の戯画化であることに気づいたからであろう。

古い因習からの解放を妨げる力は、人間の心を抑圧して硬化させる。もはや硬化した世代から見れば、伝統的な価値観——母親は子を育て、妻は夫に忍従し、主婦として家を守る——いわゆる女性の在り方から外れるマギーは、噴飯ものであろう。

慣習的な用意を偽善的とマギーが拒絶した冒頭の墓地の場面から、マギーは一貫して狭い村社会を支配する慣習という既成概念を否定し続ける。慣習的な価値観を敵視し続けるマギーは、偽善と欺瞞への痛烈な皮肉の表象者である。

マギーを利己的で偏屈な女性と考える人は、最後の場面のマギーの孤高性に、首肯することはない。

1960年代後半にアメリカから広がった女性解放運動を待たずして、前世代が当然と思う女性の生き方に反する女性が、キーンの舞台には現れていたと言える。しかしマギーはそうした時代の運動に沿った女性にとどまらない。マギーは個人・個性を歪めかねない家父長制や教会や村の社会の伝統・因習に訣別する強靱な精神の持ち主なのである。